

# 『ガウェイン卿と緑の騎士』に見る「異界」の表象とその意義について

## 要旨

氏名：中川健司

### 1. 「異界」の表象

『ガウェイン卿と緑の騎士』は 14 世紀に中英語で書かれた中世英文学の傑作である。アーサー王物語群の一つを構成する作品であり、主人公のガウェインは、突如キャメロットに来訪した奇怪な「緑の騎士」との約定を果たすため、一人宮廷を離れ目的地も分からぬまま旅を行うこととなる。本論ではガウェインの旅路とその目的地が、中世文学に登場する「異界」として描写されていることを、本文中の表現に依拠しながら示していく。

最初の表象は「空洞の丘」である。これは古代アイルランドにおける異界である「シード」の残滓であると考えられ、本作品においてはガウェインの旅の目的地である城館と「緑の礼拝堂」がこれに該当する。

二番目、三番目の表象は「荒野」「谷間」である。「異界」の周辺およびそれに至る道の表象であり、「異界」の到達困難性を示す。

四番目は「水」である。大地を区切る「川」や、視界を区切る「霧」としての表象である。浅瀬を越えるごとに野獣に会敵するほか、川の水が沸騰しているかのように描写される。

本論で取り上げる最後の表象は「モーガン・ル・フェイ」である。彼女はアーサー王物語群に登場する魔女であり、「異界」の島に住んでいるとされる。

## 2. 「異界」の意義

様々な要素を駆使して「異界」を作品中に配置することにはいかなる意義があるのかを述べる。最初にして最大の意義は「循環する空間を定義すること」にある。「異界」として「緑の礼拝堂」が存在することで、キャメロットを出発し、「緑の礼拝堂」へ赴き、最後にはキャメロットへ帰城するという作品内における空間の循環が確立する。

キャンベルが提唱した「英雄の旅」の理論によれば、英雄の神話には1) 未知なる世界への進行、2) そこでの勝利、3) 力を得て元の世界へ帰還する定型が存在し、これによって英雄は幼年時代の終わりを迎え、真に英雄としての自己を獲得するとされる。すなわち、「異界」を設定することで主人公であるガウェインは「英雄の旅」を行い、真なる騎士としての自己を獲得することができるのである。

そして、その背景には、本作品が英語で著述されたアーサー王物語の中では初期の作品であり、従来のアーサー王文学ではフランスの騎士であるランスロットにその地位を奪われ、低い地位に甘んじていたイギリスの騎士ガウェインを復権させる狙いがあったものと思われる。